

【講演会】

釈迦の生き方

佐々木 閑

本日はお招きありがとうございます。花園大学の佐々木と申します。私、元々は浄土真宗の寺の生まれなんですが、後継ぎ後継ぎって言われたもので、親の言うことなんか聞くもんかかっていうんで、反発をしまして、坊さんなんかなりたくないって、それで工学部に入りました。そして工業化学というのをやりました。しかし、二十二歳で卒業する頃になってくるとだんだん人間の生き方というものを真面目に考えるようになってきました。

何が問題なのかというと、やっぱり歳を取っていくと、だんだん死ぬんだなということを真面目に考えるようになってきたんですね。

二十二だから、まだまだ先はあつたんですけども、しか

釈迦の生き方（佐々木）

しながら、やはり人が生きていくというのは、これは死との闘いであるというようなことを考えるようになりました。

それで、嫌だ嫌だと言っていた仏教ですけども、もう一度見直してみると、案外面白いじゃないか、悪くはないなという気がしてきました。それで、工学部から文学部へ今という編入学ですね、四回生卒業してからもう一度三回生に戻るということで、文学部の仏教に移りました。

それまでは、仏教、仏教といってもよくわからなかったんですね。例えば、親鸞聖人がどうこうとか、法然上人がどうだとか、道元さんがどうだというような、そういう人たちの一人一人の生き方が、それぞれ仏教なのかと思っ

釈迦の生き方（佐々木）

ていたんですが、実際に入って勉強してみますと、実は大本は釈迦という人から出発した一本の糸であるということがようやくわかってきました。

日本の仏教というのは、そういう沢山の糸の分かれた中の様々な要素が入り混じって成り立っているのですが、その一つ一つを別個に見ていっても、仏教の本筋はどうもわからないんじゃないかというような気がしてきて、これはやっぱり元へ戻らなくちゃいけないということで、いわゆるインドの大元の仏教、つまり釈迦に興味が惹かれていきました。

二五〇〇年も前の人だからどんな人か全然わからないんですけども。とにかくどんな人だったんだろうということに大変興味が沸きまして、それで仏教研究というもの自身を入れるようになって、そこで私は初めて真面目な人間として人生を歩み始めたわけなんです、大分時間がかかってたんですね。真面目になるまでにね。

そして、こんな歳になるまでずっとやってまいりました。皆さんにも今日そうやって私が調べたこと、あるいは自分で考えたことで、釈迦というのは、どういう考えの人

だったのかというのをできるだけ具体的なイメージで知っていたきたいというのが今日、ここへ来た理由です。

若い人の前で仏教の話をさせてもらおうというのは、大変私にとってありがたいことなので、そういう思いで来ております。

とにかく、あまり聞いたことのない仏教の話を今日はしようと思います。若い方には一時間半じつとしてるのは退屈かもしれません、どうぞしゃべらずに私語をせずに座っていて下さい。私は、仏教の授業というのは、ただ知識を得るだけではなくて、正しい姿勢でものを聞くという一番大事なことも学ぶ授業だと思っております。

花園大学で学生がしゃべった時には目の前まで行って怒鳴りつけて、教室から放り出すんですけども、今日そういうことをするわけにはいきません。でも、まあ静かに聞いてください。

今から二五〇〇年前のインドにお釈迦様という立派な方が現れ、この方が出家をして修行をして、そして最後は菩提樹の下にお座りになって、そこで悟りを開かれました、というのが仏教の出発点ということになるのですが、これ

だと実は仏教の本質がわからないんです。

なぜかといいますと、どうして釈迦は、その時仏教を作らなければならなかったのかということが全然説明されていないからです。

これだけですと、お釈迦さまは、たまたま思いついて、その時趣味で仏教を作ったんじゃないかとそんなふうに思われるのです。ですから今日お話をするのは、釈迦がなぜ仏教を作ったのか、その必然性は何かというお話をしたいと思います。

したがって、話は釈迦の伝記ではなくて、釈迦よりも前の話から始まらなければならないのです。釈迦よりも前の時代にどうしても仏教を必要とするような社会情勢があったために、それに応えて釈迦は仏教を作ったということです。

じゃ、その社会情勢とは何だったのかということをお話さないで仏教の本質がわかりません。それで今日は、釈迦よりも前の時代の話から始めます。でもまず、とっかかりは紀元後の一七〇〇年代から一八〇〇年代のころから始めます。今からいうと二〇〇〇年程前の話ですね。そのころのイ

釈迦の生き方（佐々木）

ンドをちょっと想像してほしいのです。

たった二〇〇年程前のインドで何が起こっていたか。おわかりですか？ 二〇〇年前っていうのは、ヨーロッパの国々が世界を征服していた時代です。イギリスとかフランスとか、そういった国々が世界の各地に飛び出して行って、弱い国々を抑えつけて、植民地にして、そしてそこから富を吸い上げていた時代なんです。

では、植民地って何のためにとるんですか？ 植民地というのは、一見、持っているだけで得をしているような気がするんですが、実はそんな単純な話ではなく、植民地を持つにはそれなりの合理的な理由があります。それは何かというと、実に簡単な理由です。儲けるということです。当たり前ですね。

子どもの遊びじゃないんだから他の国取って、さあ取ってぞ偉いだろうって、そんな威張ったってしょうがないんです。その植民地を持つことによって、自分たちの国が儲かれば意味がないわけです。

だから、何の価値もないような土地を植民地に取ったって、それは何の価値もないわけ。それで、このインドとい

う国は、二〇〇年前にどこの国が植民地にしていたかという、イギリスです。

インドもそれからスリランカもそして今でいうところの پاکستان、アフガニスタン、あの辺りは、みんなイギリスの植民地だったわけです。イギリスという国は大変ずる賢い国で、世界で一番うまいやり方で植民地支配をした国です。

では植民地支配でうまいやり方は何かというと、できるだけコストをかけずに沢山儲けるといことです。当たり前です。コストがかかったら大変なので、儲からなければ植民地を持つ意味がない。できるだけ低コストで植民地を持つためにはどうしたらよいかということ。イギリスは常に考えた国です。

考えてみてください。インド一国を植民地にして、例えばそこから儲けようと思つたらどれだけコストがかかるか。そのためにはインドの人々を全部抑えつけないと無理。

インドの人たちがみんな独立したい、「我々は自由だ」と叫ぶのを全部上から武力で鎮圧しなければならぬ。

ら、どれだけ沢山の軍隊をここへ駐留させなければいけないか。そして、司法、行政、その他の様々な機関にどれだけのお金をかけて、全体を統一しなければいけないか。

普通だったらイギリスの方が破産してしまいます、そんなことをしたら。ということは、もっと見返りのあるものが入って初めてイギリスは植民地を持つ意味があるわけ。

それで、イギリスがこの国を植民地にした時に、すぐやったことは、この国で一番儲かるのは何だということ。考えたわけです。どうすれば儲かるかということ。考えた。

そして、どういう方策を取ったかというと、イギリスの国の中の一流のエリートたち、オックスフォードとかケンブリッジを出た一流のエリートの、様々な種類の学者をイギリスの本国の十倍ぐらいの給料を払ってインドへ送るんです。高官として。そしていろいろな儲けの道を探っていたわけです。

ですから、いろいろな学者が送られました。地質学者、植物学者、動物学者、言語学者、いろいろな種類の学者をイギ

リスはインドへ送り込んだわけです。そして、どうなったかというと、見事にイギリスは儲かるものをいっぱい見つけた。

それが、イギリスという国を世界一の貿易国、債権国にした理由です。そのイギリスの植民地政策には面白い話がたくさんあるのですが、今はとぼしまして、そうやってイギリスからインドへ送られた、ある一人の言語学者のことからお話を始めます。

その人の名前は、ウイリアム・ジョーンズといいます。四十カ国語が使えるという天才的な言語学者です。

イギリスから大変なお金をもらってインドに赴任し、そしてインドの言葉を調べ始めるわけです。そして彼は研究を始めた途端にびっくりするわけです。それは何かというと、その当時土地のインド人がしゃべっている言葉が自分の母国語の英語と同じ言葉なんです。

同じってというのは、同一という意味じゃないですよ。同じ系統の言葉なんです。文法も単語も調べてみれば、絶対に間違いなくつながっているということがわかるわけです。これは、大変ショッキングな話なんです。

釈迦の生き方(佐々木)

私は、これをいつも例え話でこういうふう言うんです。日本人が、ロケットを作って火星探検に行ったんだと。日本人の宇宙飛行士が火星に着陸して、そして誰もいないと思った火星の地面に降りて、ヘルメットかぶって歩いていたら、岩影から足が八本ある蛸のような火星人が現れて来た。そして、火星人はどうしたかという、突然日本語で「こんにちは」と言った。

びっくりするよね。何でここ(火星)で日本語聞くの？ っていうことになるでしょう。それとほぼ同じシヨックなんです。このウイリアム・ジョーンズの話っていうのはね。

ヨーロッパでは、それよりもっと古い言葉で、ラテン語という言葉がある。これはローマで使っていた言葉ですね、古い言葉。そのラテン語とインドの言葉を比べてみるとますます似ているということがわかる。

ヨーロッパでもっと古いのは、古代ギリシャ語です。インド語と古代ギリシャ語を比較してみると、もう誰が見ても明らかに同じ言語なんです。

では、この事実からどういう結論が出ますか？ 今の言

葉を比べたら、ちよつと似ている。もつと古い言葉比べたら、もつと似ている。古くなればなる程よく似ている。じゃ、どういことが推測できますか？

それは、元々が一つの言語だったということです。元が同じだったということです。何千年もの間に枝分かれして、少しずつ違つていったけれども、元を辿れば辿るほど、一つのものに近づいていくということです。そうですね。

ここで、初めてヨーロッパの言語と、それからインドの言語は実は同じ言語であるという、世界の大発見がおこなわれたわけです。

これは、ヨーロッパの人にとっては大変なショックでした。今まで野蛮な国だと思つて馬鹿にしていたのに、実はそのインド人が我々ヨーロッパと同じ民族なんだということになってきたわけです。そしてその時からヨーロッパでは、一大インドブームが起こるんです。インドを研究するということが、ヨーロッパにとっては大変な問題になってくる。自分たちのルーツの研究になってくるわけです。

ウィリアム・ジョーンズがこういう発見をしたのが一七九〇年代です。今から二〇〇年ちよつと前ですね。

その後、一八〇〇年代に入つてからヨーロッパでは一大インドブームが起こつて、ヨーロッパの主要な大学には、みんなインド学講座、あるいはインド学部というのができるようになるんです。フランスにもイギリスにもドイツにも、そういった各国の主要大学にはインド学講座というのが置かれるようになっていくわけです。すごいですね。

さて、それで、もつと言葉の研究を進めて、どこからどこまでが一緒なのかつていうのを調べてみたら、まずヨーロッパの言葉は、ほぼ九十九%インドの言葉と同じです。フランス語だろうが、ドイツ語だろうが、何を取つたつてみんな同じです。つながっています。

インドとヨーロッパの間には、私たちが今知っているイランとかイラクというような国がありますが、そこはどうかだろうというふうに調べてみると、古代イラン語というのが残っています。

これも、一緒でした。つながっていました。つまり、西から東まで、サーッと一面同じ言語であつたことがわかり

ました。すごいことです。

考えてみると、このヨーロッパの人たちが、やがて新大陸を発見してアメリカに渡つたわけですよ。北は、イギリス、フランス系、南はスペイン、ポルトガル系の言葉が入っています。今でもそうでしょう？

それが、全部ヨーロッパの言葉であるということは、アメリカだつて全部この同じグループに入るということです。では、一番東、日本に近い所は、どこまで来るのか、その言葉はどこまで来ているかというところ、これは敦煌です。

敦煌で見つかった古い、今はもういなくなつてしまつた民族の文書が残つてましたが、その言葉が、やはり同じ系統でした。だから、一番東は敦煌まで来てます。

それが、全部一つの言葉なんです。それは、信じられないですよ。でも、そういうところが、実際に見つかったわけです。

それで、その一番大本の言葉をどういう名前で呼ぼうかということになる。もうしようがないから一番てつとり早い言い方で、インド・ヨーロッパ語つていうんです。

釈迦の生き方(佐々木)

途中にイランが抜けているから、イランの人怒つちゃうかもしれないけども、ともかくインド・ヨーロッパ語と呼ぶのです。

我々は、これはモンゴロイド、東洋系の言葉なので全然違います。ヨーロッパからインド、敦煌辺りまでは全部インド・ヨーロッパ語なんです。

ちよつと言つときますと、ヨーロッパの国々の言葉の十九%だと言いましたが、少しだけ違う、インド・ヨーロッパ語でない言葉が少し残っています。それは、一つは、スペインとフランスとの中間、間にピレネー山脈という山脈がありますが、この山脈よりちよつと下がつた所にバスクと呼ばれる地域があります。バスク地方。

このバスク地方のバスク語は、インド・ヨーロッパ語ではありません。恐らくその地方に昔からあつた、古いヨーロッパ語なんですよ。そういうものがあります。

それから、逆に今度は新しくつて、ヨーロッパの中でも新しく入つて来た言葉なので、インド・ヨーロッパ語でない言葉があります。

ヨーロッパ人は、みんな白人だと思つていたら大間違

で、ヨーロッパには我々と同じような黄色人種の血の流れた国が、いくつかあります。それは、いつできたのかというとうと、モンゴルがヨーロッパに侵入した辺りからモンゴロイド、いわゆる元の人たちが入り込んで作った国があります。

モンゴルがヨーロッパに入った時は、自分たちのことをフィンと呼んでいました。俺たちは、フィンだと言って入った。ヨーロッパの人たちはフィンが来た、恐ろしいと言って怖がった。そのフィンが作った国が、今でもヨーロッパに二つ残っています。

どちらもフィン为国つていう名前でも呼ばれています。フィンランドはフィンランド。そしてもう一つ、フィンガリア。ハンガリーですね。これらの国の言葉はインド・ヨーロッパ語ではないんです。

それぐらいです。あと、エトルリアとかありますけども、それ以外のほとんどは、このインド・ヨーロッパ語なんです。よろしいですか？

ここで、一つの事実がわかりました。ヨーロッパからインドまでは一つの言語である。

そして私たちは、もしそういうことを聞かされると、すぐにこう思います。あつ、それじゃ昔は一つの民族がいて、その民族が、何千年もかけてヨーロッパとイランとインドへ分かれて行ったんだなと。

ところが当時のヨーロッパ人はそうは考えなかったんですね。いいですか？ もういつべん言いますよ。

言葉が全部同じだということがわかったのに、それなのに、ヨーロッパの人たちは、「一つの民族が何千年もかけてヨーロッパからインドまで広がったんですね。」とは言わなかったんです。

それはなぜでしょう。

時代は、一八〇〇年代です。まだ、キリスト教が強い。

キリスト教の人たちにとって世界の歴史というのは何ですか？ それは、ネアンデルタールでもなければクロマニヨンでもない。全ての歴史は聖書です。聖書に書かれた、アダムとイブから始まる、あの創成記が、世界の歴史なんです。

その聖書をおきながら、それとは別個に何千年もかけてどこかの民族が、ヨーロッパ人になりました、イギ

リス人になりました、ローマ帝国を作りました。全然それは、聖書と話が合わないわけです。

ですから、当時のヨーロッパ人は言葉が一緒だということまでは認めたとしても、それが一つの民族であるというところは、認めることができなかつたんです。これを認めることができるようになったのは聖書が崩れてからです。

聖書の権威が崩れてから。

つまり、聖書の歴史は本当の歴史ではない。本当の歴史は、地球の歴史は、何億年もかけて少しずつ進化してきたという歴史であるということが初めてわかって、その段階で初めて、単一民族説というのが出てくるわけです。

それはいつかというところ、もう今言いましたね、進化という話が出てきたことからわかるように、チャールズ・ダーウィンが「進化論」を発表して、世界がそれを認めた時から後です。

だから、ダーウィンの「進化論」がいかに世界のいろんな人の考え方に影響を与えているか、というのがわかりますね。

ダーウィンの「進化論」は、『種の起源』という本です

釈迦の生き方(佐々木)

ね。ご存じだと思いますが、『種の起源』という本をダーウィンが書いた。これが「進化論」の最初です。一八五九年です。

ですからウイリアム・ジョーンズが、言葉の発見をしてから、約五〇年程して「進化論」が出てきて、そして聖書の歴史が崩れ始めた。その中で、ヨーロッパの人たちは初めて、「ああ、それならば一つの民族があつて、それがいるんな所へ分かれていったと考えても不思議じゃないな」と考え始めるわけです。

じゃあその一番最初の民族って誰なんだ、何という名前と呼ぶべき民族なんだという話になってきます。ヨーロッパからインドまでのこの一つの文化圏を調べた場合に、その中で一番古い本は何かというところ、これは実はインドに残っている本が、その中で一番古いということがわかりました。その一番古い本のことを『ヴェーダ』と言います。実際は本ではなく口伝で伝えられたものですが、今でもインド人の多くの人たちが、この『ヴェーダ』を唱えます。インドでとても聖なる言葉です。聖典です。

この『ヴェーダ』の中で、自分たちの民族のことを聖な

る民族と呼んでいる場所があるんです。その「聖なる」という言葉は何ていうかと言うと、これは「アーリア」と言います。

そこで今の学者たちは、一応便宜的にその民族の一番大本の起源を、「アーリア人」と呼ぶことにしているんです。

ですから、言ってみるとイギリス人もフランス人も、みんなアーリア人の子孫です。インド人もアーリア人の子孫です。イラン人もそうです。みんなアーリアということになる。

ではそのアーリア人は、どこから出て来たんだらうか。

これは、我々人類の永遠の謎の一つです。アーリア人というのは、一体生まれ故郷はどこなんだ、ということを決めた学者が今研究をしています。なかなか見つからない。今のところウクライナ地方、あるいはスカンジナビア半島などが候補地ですがよく分かりません。

私の高校の時の同級生が、今科学者になって遺伝学をやっているんです。静岡県の三島に国立遺伝学研究所というのがあるって、そこで遺伝の研究をしますが、聞きましたらこの間インドの遺跡から、今から三〇〇〇年程前の人

骨が出た。これは火葬ではなくて土葬にしてあるんです。これが大事なんです。火葬にした骨は、DNAが全部崩れてしまいますので、駄目です。土葬にした骨からは、DNAが採れる。

そのDNAを採って、そのDNAの特性をもし調べることができれば、それを現在のヨーロッパの各地の民族のDNAと比較検討することによって、どことつながりが一番深いかということ調べることができるといえます。

もし、これがうまくいくとアーリア人の系統だとか、そういうものを調べる新しい道筋になると言っていました。今その骨を分析中です。「早く教えて」って言うんだけど、なかなかうまく出ないんだと言っていました。

以上、まとめて言うところですが、大昔アーリアンという人たちがどこから出て来て、それは西に東にずうっと広がって行ったんです。同じ言葉を携えながら広がって行った。

そして、その一部はインドに入ったわけですから、インドの言葉になっているんです。

今のインドへ行くとわかりますが、北の人たちと南の人たちとは明らかに人種が違います。行ったことのある人はご存じかと思いますが、南のインドへ行きますと、私たちアジア人に非常に近い顔のインド人で、色も黒い人たちがいっぱい住んでいます。

それに対して、北の方へ行きますと、色が白い人たちがいっぱいいます。

これはね、つまり元タインドに住んでいた人たちがいて、そこへ後から白人系のアーリア人が入って来たからです。つまり、上から侵入してきて、元々住んでいた人たちを下に押しつける形になって、上に新たな人種が入るということで、北と南で二種類の人種構造を取るようになったわけです。

アーリア人がインドに入ってきた時の具体的な様子はよくわかりません。軍隊を形成して、一挙に攻め込んで、占拠したというような形では全然ないのであって、何百年もかけてぼつぼつぼつと、移住しながら気がついてみたら人種が増えていたというようなそんな形の、ゆっくりした侵入だろうといわれています。

釈迦の生き方(佐々木)

いずれにしても元々のアジア系の人が入ったところへ白人系の人が入って来て、二種類の人種構造ができたことは間違いないんです。その人種構造の特性は何かというと肌の色が違う。

もつと簡単に言うと、見ればわかる。見ればわかる人種差別というのは、恐ろしいんですよ。元々が違う、見た目の違う人たちが作る差別構造は、きついです。アメリカの白人、黒人もそうですね。そして、インドに起こったこのアーリア人の侵入によって作られた、二種類の人種構造は、まさに肌の色なんです。

本来ならば、上のアーリア、下の原地人ということで、二種類の構造になるはずですが、更にそれがいくつかの職業的な違いによって、これが二つではなくて四つに分かれたわけです。もうだんだんわかってきましたね。これが有名なカーストです。

カーストという言葉は、これはポルトガル語です。インドの言葉じゃありません。ですから、本当のインド語が別にあります。それは、ヴァルナといいます。意味は、簡単です、「色」です。

そのものズバリ。肌の色。バラモン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラ。この四つをカーストと言います。上から順番に下がっていきますが、しかし実はこの四つプラス、この下にもう一つ階級があって、それは「カースト制度に入れてあげない」という人たちです。

カースト制度に入らないということは、これは極端にいうと人間として扱わないということです。そういう人たちはチャンダラと呼ばれる。このカースト制度は、アーリア人が入り込んで来たことよって生まれたわけですから、すごく古い時代、おおよそ今から三五〇〇年から三〇〇〇年ぐらい前、つまり紀元前一五〇〇年から一〇〇〇年ぐらいの間にこういうことが起こったのではないかといわれています。記録がないからよくわかりませんが、年代のことは。

このバラモン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラ、チャンダラというカースト制度はそのあとどうなったかというところもなっていない。今もインドに残っています。だから、インドは今でもカースト制度の国です。

憲法上は、法律上は、人間は全て平等であって、カース

ト制度によって人を差別することは許されないということになっておりますが、実際の現実生活の中では、やはりこれは強い社会の縛りになっています。今もあります。

この間インドで総選挙がありましたね。有権者七億人というところでもない選挙だったけれども、その選挙の政党を見ていたら、何十ものいろんな政党が並び立っているんですが、その中にはそれぞれのカーストを代表する政党というものが、ちゃんとありました。

そうすると、その党首はね、「私はチャンダラの代表として虐げられたチャンダラの人権と権利を守るために今、立候補します」と、こう言う。そうすると、もちろんその支援者たちは、その階級の人たちです。

そういうふうにも今でもインドは、この差別制度を中心として動いている国なんです。さて、そこでこのカースト制度の原則を今からお話しします。これが、仏教と密接につながるところです。

まず、カースト制度の基本は何かというと、絶対に変えられないということです。生まれた時に決まります。どの家、どの家系に生まれたかによって、カーストは絶対的に

決められてしまいますので、生まれた後に何かをして上に上がるとか、そういうことはありません。

カースト試験なんてのがあってね、受かったら上へ上がる。それだったらいいんだけども、そんなものほどこにもないので、生まれた瞬間に決まります。

例えば、チャンダラで生まれた人が、一生懸命頑張って、そして例えば勉強して、会社の社長になり、やがて政治家になって、首相になった。ありえます。できます。

できるけども、その人は、死ぬまでチャンダラなんです。チャンダラの首相ということで、社会的に身分は下だというふうに思われたまま一生を終るわけです。

簡単に言いますとバラモンというのは、どういう人たちかというと神様との間に交信をする人たちです。

神の声を聞き、我々の声を神に届けるということができ、神と我々との仲介役に立つのが、このバラモンと呼ばれる人たち。つまり、このバラモンを怒らせるとバラモンは神を使って我々に悪いことをするわけです。怖いですね。

その代わりバラモンを奉って、沢山の貢物をあげるとバ

釈迦の生き方(佐々木)

ラモンは我々のためによいことを神様にお願いしてくれるわけですね。これは強いですよ。神様を味方に行っているんだからね。だから、バラモンが一番上に来るわけです。

クシャトリアはその次の現世、この世の中の力を持つ人たち。お金があつて、権力がある人たち、王侯、貴族、そういう人たちがクシャトリアといわれます。だけでも、クシャトリアもバラモンには頭が上がりません。クシャトリアが一般的な市民です。

それからシュードラは普通これは奴隷というふうに訳されますが、決してイメージとしては、足に鎖を付けて働かされている奴隷という意味じゃないんです。そういう奴隷はインドにはなかつたんですね。そうではなくて、いわゆる小作とか、召使のように、ご主人に使われて、そして職業を変える自由がない、そういう人たちです。これが、シュードラと呼ばれるんですね。

チャンダラは、もう食べるのも必死、動物並みの扱いをされる人たちです。

この五つが生まれながらにして決まっていますので、社会は全部血筋と家柄で決まっています。

結婚はどうするのかという、違う階級の人が結婚をしていきますと、どんどん制度が崩れていきますから、絶対にそれは許されない。誰が許さないのかというと、もちろんバラモンが許さないんですよ。

そこで、違う階級の人が結婚をしないような様々な方策を考えてあります。例えば、違う階級の人が結婚をした場合には、できた子どもは下へ落とす。下に属する。男が上で女が下の場合、できた子どもは、女性の方のカーストになります、低い方。

女が上で、男が下、これはもっと悪い。できた子どもはチャンドラになる。だから子どものこと考えたら結婚できな。先行きの不幸を考えたら。そういう悪辣な形で血が混じらないようになってるんですね。

このようにヴァルナつまりカースト制度は五段階なんです、インドでは、このヴァルナが更にサブ・カーストと呼ばれる、小さい職業ごとの区分に分かれていくんです。それがいくつあるかは誰も知りません。

話によると四〇〇〇から六〇〇〇といわれています。つまり、インドは人間を四〇〇〇から六〇〇〇のカテゴリー

に区分してランキングを付ける、そういう国なんです。それがほとんど職業と対応してるんです。

例えば、皆さんがよくご存じの蛇使い。私はインドで何べんも会ってます。近所にはいないと思うんですが。笛吹いて、コブラがフニャアアとこう踊る、あれです。

あれは蛇使いカーストです。そういう村があって、そこに住んでいる人たちは蛇使いというランキングに属します。だから、そこで生まれた子どもは、もうそのカーストの子どもですから、蛇使いになるんです。もう決まってるんです。

昔の日本みたいだね、どこどこに生まれたから、もう必ずそこに住むんだっていう話ですよ。その村では、子どもが生まれると、その子どもにおもちやを与えますが、おもちやば蛇です。

小さい時から蛇に触つていれば怖くも何ともないよね。そうやって、最初は毒のない蛇に触らせて、そのうちにコブラでも平気で触るようになって、そういうふうな形で職業訓練までこのカーストは行うようになってるわけ。大変なもんですね。

今はこのような状況も少しづつ変わっているようですが、でもまだまだ先は長いようです。このカーストに基づく一つの社会組織のことを、これをバラモン教と呼びます。なぜならば、一番トップに来るのがバラモンだから、バラモンを中心とした社会構造ということで、これをバラモン教と呼ぶんです。

私は、バラモン教というよりもバラモン主義と呼んだ方がいいんじゃないかと思っています。資本主義とか、共産主義と同じように、その当時のインド社会全体を動かしていく、一番基本原則という意味では、宗教というよりは、これはひとつの社会原理ですね。

だから、バラモン主義と呼んだ方がわかりやすいと思いますが、いずれにしてもそういう価値観で、当時のインドは運営されていたわけです。これも全てアーリア人の侵入から始まった一つのインド独特の社会現象ですね。

これが三〇〇〇年から三五〇〇年ぐらい前だろうといわれている。そして、それが三〇〇年、四〇〇年、五〇〇年たつとバラモン主義の世界はだんだんこうインド全域に広がっていきます。

釈迦の生き方(佐々木)

そうするとカースト制度ででき上がっているバラモン主義が、何ていうか沢山の富を産み出す土地に広がっていくわけです。ここで問題が起こってくる。

何かというと、実際に富を多く産み出す場所で、権力を持つのは、実はバラモンではなくて、現世の王侯貴族たちだから、クシャトリアなんです。

みんなが貧乏だったらね、今言った神様が中心の世界でいいんだけど、沢山の富が取れるようなところになると、要するにお金持ちというものが生まれてくるわけです。そのお金持ちというのは、実際はバラモンじゃなくて、二番目のクシャトリアたちが、お金を儲けていくわけです。それから、社会構造の中で一番上にいる人たちよりも、二番目にいる人たちが力が強くなってくるわけです。

これが、今から二五〇〇年前なんです。これが釈迦の時代ですよ。

こうして、カーストを中心としたバラモン教の世界観をひっくり返そうかという動きが、やつと二五〇〇年前に現れてくるわけです。

お釈迦様は階級は何ですか？ お釈迦様はどこで生まれ

たんですか？ 学生さんたちもすでに何回か授業を聞いているはずだから、知ってますよね。お釈迦様はカピラ城と呼ばれる今でいうネパールの中の小さな国の王子として生まれたいという事は知っていますよ。

王子様ですよ。

本来ならば王子になるところを途中で出家して、それをやめて宗教家になったんですから、そこから明らかにわかるとおり釈迦の階級はクシャトリアです。

バラモン教というのは、どう見たってバラモン有利です。生まれが全てを決めるんだから。その後、頑張っている、いっぱいお金を儲けても、どんなに努力をして地位を高めても、自分のこの身分というものは決して変えることができないというのが、バラモン主義ですから。これに対して反感を持つ人、これをひっくり返そうと考える人が当然出てくるわけです。

どこから出てくるかという、一番虐げられたチャンダラやシュードラからは出て来ないんです。そんな力はないんです。社会的に全てを奪われていますから。

階級闘争が起こる時には必ず一番上と、それからその下

にあつて、上よりも力を持った階級との間で起こります。それが、まさに今から二五〇〇年前のこの辺りで起こったことです。反バラモン主義の登場です。

バラモン主義は、人間の価値は、生まれた時に全部決まるといふんです。したがって、これに反対する人が出て来たとしたら、対立する人は何ていうか。当然それを否定しますから、「人間の価値は生まれた時に決まるのではない」と言います。当然ですよ。

じゃあいつ決まるのか。人間の価値が生まれた時に決まるのではないなら、いつ決まるのか。それは生まれた後に決まっています。

もし人間の価値、あるいは幸せのレベル、ランキングがあるとしたら、それは生まれた後に決まるはずですよ。

じゃ、何が決めるのか。当然生まれた後に決めるものは何かといったら、その人その人が自分でどれだけ何をするかによつて決まる。つまり、もつと簡単にいうと、努力によつて決まるということになるんです。

ここで初めて人の価値は努力だという、新しい考え方が出てくる。今の我々だったら当たり前のことですね。

私たちはこんな時代に生まれてとても幸せですよ。努力した分だけ、その人の価値が高まるって考えてくれている世の中に生まれて、皆さん本当に幸せだと思いませんか？

江戸時代だって土農工商ですよ。それは絶対に曲げられない身分制度で、生まれた時にその人の生き方が全部決められているっていうのは、こんな寂しい話はない。二五〇〇年前のインドでは「人間の価値は努力だ」という、この新しい価値観が生まれてきたのです。

それではどんな努力をするのか、ここが問題です。努力、努力と言いますが、何をどうすりゃいいんですか？ということになってくるわけです。

そのころのインド人は、努力といっても何が努力なのかわからない。基準は誰も与えてくれなかったわけで、突然そんな話になったわけだから、みんな迷っちゃったわけです。みんなばらばらいろんなことを言い出すわけです。人それぞれですよ。

その当時、反バラモン教の人たちがいっぱい出て来まして。その人たちは、みんなそれぞれがてんでばらばらに、「これが私の努力だ」といって、勝手なことを言い出した

釈迦の生き方（佐々木）

わけです。中には変な努力がいっぱいあるわけです。

例えば、「死ぬまで片足で立っている」。本当ですよ。なぜならば、それはとても辛いことです。その辛いことを死ぬまで続けるというのは大変な努力でしょう。

もつと簡単にいうと、肉体をいじめてその辛さを我慢することが努力だと考える一つの流れです。「死ぬまで爪を切らない」というものもある。見たことがありますか？

大抵こういうとこで話をして、見たことある人っていうとね、必ず手を挙げる人がいます。はいっ見たことある人。ねっ、いるでしょう。テレビで見たんでしょう。

どんなテレビかと言うと『世界奇人、変人、大集合』みたいな番組。なに人でしたかって聞くとたいていインド人でしたとみんな言う。それは無理もない。なぜかという爪を切らないというのは、その時代からの伝統なんです、インドの。

努力の一つの典型的なパターンとして、今もインドに残っているんです。爪を切らないとどうなるかというところくるくるつと巻きます。三〇年、四〇年切らないところなるんです。それをいつも抱えて歩く。ほとんど片手が

使えないんですね。努力です。

このようにその当時、努力が必要だということで、それを肉体的な苦痛、肉体的な我慢が努力だと考える人たちが現れました。しかし、それとは別に、違うことを考える人たちも出て来ました。それはどうかというと、こういうふうに考えます。

私たちの幸せというのは、生まれた時に決まるのではなくて、生まれた後の努力によって決まるのである。ここまでは一緒です。しかし、その努力によって幸せな人生を送る時に、その努力が、もし肉体的な苦しみや痛みを我慢することだと考えると、肉体の我慢と心の幸せは全然つながってこないじゃないかと、こういうことになる。

もっと簡単にいうと、何で爪を伸ばすと心が幸せになるのかわからないということですよ。そうでしょう？ 片足でずうっと立って、忍耐力はつくけども、忍耐力がつくということと幸せは全然関係ないじゃないの。

もし、我々が本当の幸せというものを心で感じるのならば、その幸せのための努力は、心の中でやらなくちゃ駄目でしょう？ という考え方の人たち。

つまり、肉体をいじめることには何の意味もないのであって、本当の努力というのは、我々が心の中で何をするかという点に全てがかかってくるという、もう一つの別の流れの考え方の人たちです。

肉体をいじめる人たち、この人たちのことを苦行者と言います。苦行ですね。一方、苦行でない人たちもいる。それは心派、心の中で修行をするという人たちです。

どちらもカースト制度に反対をして、反バラモン教を唱える人たちなんですが、その努力の方法が、肉体へ向かうのか、精神に向かうのかで二つに分かれるわけです。そして、釈迦という人は、その「精神派」のチャンピオンなんです。

お釈迦様の伝記を簡単に言います。三分で言います。

お釈迦様という人は、今から二五〇〇年前、北の方、ヒマラヤが見えるような山の上の方の涼しいカピラ城という国で生まれました。その王様の息子として生まれま

た。
ですから、放っておいたらそのまま王位を継いで、その国の王様になるはずだったんですが、しかしやがて若い時

に自分の人生を考えてみて、「人間の幸せというものは、決してお金だとか地位だとか名誉で購えるものではない。なぜならば、人間は必ず死ぬからだ。病気になるからだ、年を取るからだ。この三つだけは、お金や地位と全く関係なく、全ての人間に振りかかる不幸であり、そしてそれは最大の不幸である」と考えるようになりました。

私はお釈迦様ほどじゃないけど、二十二歳の頃にそんなことを考えて仏教に変わりましたが、そういうことをお釈迦様は考えて、そして自分の王子としての地位を捨てた。

捨ててどうしたかというところ、人間は全て本当は、別のところで幸せの道を見つけないと、生まれや血筋で幸せを掴むことはできないと考えて反バラモン教の道に入った。そして、修行を始めるわけです。

ところが、ところがですよ。釈迦は最初に修行で失敗をするんです。どう失敗をするかというと、苦行の道に入ってしまう。

これは、釈迦の伝記をご存じの方は、誰でも知っておられることですが、釈迦は最初、自分の体をものすごく痛め

釈迦の生き方（佐々木）

つける辛い修行に入るわけです。そして、何も食わずに断食をしながらガリガリに痩せ衰えて、まるで死人のような骸骨のような姿になって、何年間も修行をするわけです。

この時の仏像がパキスタンに残ってますよね。釈迦苦行像といって。私も見たことありますが、どこからどう見てもこれは死骸をそのまま描写したものだと思うぐらいガリガリの恐ろしい仏像です。

しかし、釈迦は、それを何年間か続けた結果、それは間違いだということに気がついて、全部捨てます、リセットします。そして、肉体をいじめることには何の価値もない、それは私の目的とする人生の幸せとは関係がないことであると気づくわけです。

肉体的に苦痛を感じることは、ちっとも修行にならないということを感じて、それで目の前を通った山羊飼いの娘さんに、「すまんけれども君の連れているその山羊の乳を私に飲ませてくれませんか」と言って、その山羊の乳を飲んで、健康を回復し、ふつくらとした体に戻り、それから自分の本当の修行を始めた。

それはどこで始めたかというところ、木の下に座って穏やか

釈迦の生き方（佐々木）

に坐禅をしながら、全てのエネルギーを、肉体ではなくて、精神の方に向ける、そういう修行に入りました。

だから、外から見ると何もしてないように見える。それが、今の仏像ですよ。ガリガリに痩せた仏さんの仏像なんて見たことないでしょう？ みんな健康優良児みたいな顔して福々しくなっているよね。

あれが、釈迦の修行の本質を現している姿です。その時の乳粥をくれた女の子の名前は、スジャータといいいます。私はいつも新幹線に乗ると、必ずアイスクリームを食べることにしている。それは仏さんに対する供養だと思っ

て食べてます。新幹線のアイスクリームはスジャータアイスクリームっていうんです。知ってました？ そこから来てるのね、スジャータ。
本当は女の子の名前は最後をは伸ばすからスジャータというのが正しいけど、商品名だからしょうがない。また、これがおいしんだね、すぐね、他のアイスクリームよりもずっとおいしいので、どうぞ皆さん、新幹線に乗ったら必ず。（笑い）手を合わせながら食べてください。（笑い）

そして、釈迦は菩提樹の下に穏やかに座りながら悟りを開いたといわれている。この伝、釈迦の話というのは、まさに釈迦が作った仏教の本質を現しているわけです。

釈迦の修行というのはね、決して滝の下で水を浴びたり、火の上を歩いたり、そんなことは一切しません。肉体は何も使わない。ひたすら座る。その代わり何をするのかというと精神を集中するんです。

精神を集中するというと、皆さん、「何のことだろう」と思うんですが、それはとても素晴らしいことなんです。普通ではできないことをするんです。

皆さんは、精神集中をして、何か素晴らしいことを成し遂げたことがありますか？ いかがですか？

あのね、精神集中とか瞑想とかいうと、すごく難しいことを言ってるように思いますが、実は恐らくここにいる人は全員精神集中の経験があります。それは、どういう時かという、一番わかりやすいのが、数学の問題を解いている時です。

学校でね、宿題に数学のプリントもらって来るとするでしょう。パッと見ると何か三角形か四角形が書いてあつ

て、そしてこれを証明せよと書いてあるわけです。嫌な感じですよ。

宿題だからしょうがない。眺めたり嫌だなと思いつながらテレビ見たりぶらぶらして、あれこれ食べてジュース飲んで、なかなか取りかかれないうけです。まあ、やろうかというところで、その数学の問題をやり始めると、まずどうするかと言うと、その問題を読む。読みながら頭の中にその問題が語っている世界を作り上げていきます。

「三角形ABCがあつて、その中点を結んで」なんて書いてあると、それを作っていくわけです。そして、証明せよと書いてあるから、これを証明しなくちゃいけないということはわかるんで、したらそれから頭の中で何が始まるかと言うと、頭の中で作った世界をいろいろとあつちをこうして、これをこうして、これを消して、ここに補助線を引いてつてなことを一生懸命やり始めるわけです。

その頃からだんだんあれを食べなくなってくるんです。そして、何となく、あれこれあれこれいっぱいやつてる内に、何となくこの辺りがいけそうだなという気配を感じてくると、テレビの音も聞こえなくなってくるわけ。

釈迦の生き方(佐々木)

そして、じつと考えていくと、やがて何が起るかというと、いらぬ情報を捨て、必要な情報だけを残して、それで何かの道筋を作っていくという、その作業が頭の中で行われていきます。そして、どうなるかと言うと最後に解ける。解けたでしょう、皆さんも。

「私は、一生に、まだ一度も数学の問題解けたことがない」という人はいないと思うんで、必ず解ける。そして解けた時には、最初わからなかつたいろいろな情報の選別が全て終つて、そして頭の中には正しい道筋だけが、きちつと残ります。それは、もう二度と消えることはありません。一度わかつたら。

そして、一番大事なこと。今言った私のこのプロセスの中で、いいですか？ その最終的な答えは、最初から問題の中にあつたんです。数学を解いている途中に、誰かが新しい情報を入れてくれたとか、新しいことを言ったから解けたわけじゃなくて、もう問題の中には一番最初から答えは入つていたわけ。

ただ私たちは、いろんな他の情報に紛らわされたり、いろいろな組み合わせを考えることによって、惑わされていた

ことで本筋の道が見えなかっただけであつて、それを我々は精神を集中することによって、情報を整理して、最終的な真理に辿り着いたわけです。

これは、簡単なミニ悟りなんです、わかりますか？

ミニ悟りっておかしいけど。釈迦は、数学の問題なんか全然解きませんでした。数学者じゃないから。しかし、釈迦が考えたのは、代わりに私たちの心の中は、どういう要素でできていて、それがどういうふうに関わり合つて、どういう感情を産み出していくのだろうかという、私たちの精神の動きですね、このプロセスを考えていつたわけです。今で言うと自分の精神を自分で分析するようなもの。

ただ、分析するだけではなくて、分析した結果、私たちの心に苦しみ、悩みを産み出すそのプロセスは何かということを考えて、そして結局、じゃその一番大本の原因は何なんだと考えたんです。

結果が苦しみであるならば、その原因を辿つていつて、その一番大本の原因を見つけて、それを消すように毎日努力して、もしそれが消えたならば、後はドミノ倒しのよう

に最終的に苦しみが消えていくのではないかと、こう考え

たわけです。

非常に抽象的に思いますが、しかし実質問題としては、これはありうる話です。釈迦が、一番最後に見つけたその苦しみの大本は何かと言うと、これは自分中心の不合理な考え方。自分を中心に全てを考えていくところに不合理性があるということです。

世の中は、自分中心になんか動いていません。いろんなものが、原因と結果が組み合つて動いていくだけの話なのに、そこに自分がいて、自分に有利にものを考えて、そして自分に都合のよいものを引き寄せて、「これは俺のものだ」と考えていく。そこに現実とのギャップの苦しみが生まれてくるんだと、こうなるわけです。

その不合理性のことをまとめて「無明」と呼びます。これが、釈迦が見つけた苦しみの原因です。しかし、無明というのがわかつたところで、それを「はい、わかりましたね、消しましょうね」と言つたつて消えるわけがない。それは染み付いていますから。その染み付きを消すためには毎日「消さなきゃ、消さなきゃ、消さなきゃ」ということを、考え続けることになる。これが、仏教の修行を長い時

間をかけて続けなければならないという理由です。

一応、ここで話をまとめてみましょうか。

アリア人の侵入によって、インドには生まれながらの血筋による身分制度、カースト制度が生まれました。それによって人間の幸せ、幸福は全て生まれと血筋だけだといふような非常に偏った人間観が生じてきました。

それに対して、それは間違ひであつて、人間は全て生まれは平等である。平等な人間が生まれてから何をやるかによつて、その人の幸せは決められるべきだと考える反バラモン教の人たちが出てきました。

その反バラモン教の人たちにも大きな二つの流れがあつて、肉体をいじめて苦行をすることでそれが達成できるという人たちと、自分の精神構造を変えることによつて初めて幸せというものに到達できるという二つの系統がありました。

その中の後者の代表が釈迦です。ですから、釈迦の仏教というものの基本を言うならば、まず人間は生まれながらに全て平等である、というこの点が絶対的に必要です。これを曲げたら仏教ではありません。

釈迦の生き方(佐々木)

そして、我々の心は自分自身で変えることができるんだ、という前提ですね、これも仏教の基本です。「変えられない」とか、「そんなこと無駄だ」とかそういうものはありません。

それは、肉体的に我慢をするという問題ではなくて、自分の心を自分で分析し、そして自分で改造していくという強い意思が、そこに必要になってくるというわけです。これが、釈迦の作つた仏教です。

しかも釈迦は、それを自分一人だけではなくて、「他の人たちにもこの道を知らせたい、教えたい」と考えましたので、みんなを集めて、「もし私が言う道に同調する、賛同する人がいるならば、私がやり方を教えるから私のところへ集まりなさい」と言つて弟子を集めました。これが、仏弟子と呼ばれる人たちです。

ですから仏弟子は何をするのかというと釈迦が辿つたのと同じ道を辿ることになります。釈迦は、自分一人で、その道を切り開いたので大変な苦勞をしましたが、仏弟子たちは、釈迦が、もう既に歩いた道を教えてくれますから、後はその釈迦の教えに従う形で、釈迦の歩いた道を後を

釈迦の生き方（佐々木）

辿って行くという事で、釈迦と同じ悟りに到達することができる。これが、仏教という一つの集団宗教の基本です。

ですから、仏教は、集団で修行をするサンガという一つの組織を必ず作るわけです。一人一人がばらばらで、山中で暮らすというようなことは仏教では言いません。必ず一緒になって暮らせというわけです。

この釈迦の仏教の修行の姿を今一番日本でよく残しているのは、禅宗の僧堂。つまり、雲水さんが男は男だけ、女は女だけで、朝から晩まで厳しい修行をするあの姿です。釈迦の時代と全く同じとはいいませんけども、比較的よく残している。あの姿が本来の仏教修行者の姿だったということなんです。

ここからいろいろと話が始まるんですが、今日は、もう終りにします。ちよつと変わったかたちで釈迦以前から釈迦までの時代との仏教の話をしました。どうもありがとうございます。